

ASCE 年次大会に出席して

フェロー 国際担当理事 (株)建設技術研究所 代表取締役社長 石井弓夫

Annual Meeting of ASCE

1997年10月にミネソタ州ミネアポリスで開かれたアメリカ土木学会年次大会に土木学会代表団の一員として参加したのでその状況を報告する。

ASCEは変わった

われわれ日本の土木学会はその英語名 Japan Society of Civil Engineers:JSCEが示すように、アメリカ土木学会 American Society of Civil Engineers:ASCEをモデルとして設立・運営されてきた。したがって、ASCEとは1988年10月調印の協力協定をまつまでもなく、80年以上にわたって緊密な関係を保ってきたのである。

その本家が少しずつ様変わりをしてきたようである。前回1996年のワシントン大会に参加した国際委員会の富永副委員長の報告(学会誌97年2月号)でも、この変化が報告されているが、今回のミネアポリス大会で筆者自身もはっきり確認した。

それはアカデミックな学会から職業的な協会への変化である。大会のメインテーマも「持続的開発のための技術革新(Innovative Civil Engineering for Sustainable Development)」であり、同時に開かれた学術講演会の主なテーマは、建設システム(Construction Congress)、法務(Forensic Engineering)、品質保証(Quality Assurance)など社会的要素の強いものであった。

新しいASCEの基本になっているのが発展計画ASCE Strategic Planである。その大要は次のとおりである。

- ①インフラの整備と維持に発言権を高める
- ②国際化に対応する
- ③政府の政策決定に発言する
- ④土木技術者の地位を高める
- ⑤情報ネットを整備して技術水準を高める
- ⑥土木技術研究財団(CERF)などによる研究開発の振興
- ⑦学校教育と社会人教育の充実をはかる
- ⑧会員の利益をはかる学会組織へ

この計画の実現にあたっては、特別委員会を設置し毎年の行動計画を立てている。

ASCE 年次大会

1) 土木学会代表団の構成：代表団の目的は、1997年10月

5日から8日までのASCE年次大会と、10月9日の第1回アジア土木技術国際会議実行委員会に参加することであった。

今回の代表団は、宮崎明会長を団長とし三好逸二専務の他、国際委員会のメンバーを中心にした総計7名からなっていた。なお、土木学会代表団とは別に建設マネジメント委員会が、Construction Congressに参加するため庄子幹雄委員長を団長とする代表団を送っている。そのほか個人で参加した会員もおられたようである。

2) 大会の性格：4日間の大会は大きく分けて土木学会という通常総会にあたる社会的行事と学術講演会にあたる学術的行事に分かれていた。代表団は主として社会的行事のほうに出席したが、上述のように日本に比べ社会的行事の割合が大きいところに新しいASCEの特徴が見られた。代表団が出席した行事とその活動状況を以下に記す。

3) レセプション(10月5日)：参加者の親睦、特に外国からの招待者を重視したプログラムが組まれ、招待者の顔合わせの集い(Conversation Forum)、国際レセプション(International Reception)、一般参加者の集い(Ice-Breaker Reception)の3回の機会があった。これらのレセプションはお互いの会話を中心としたアメリカ式のごく質素なものであった。Ice-Breaker Receptionはコントラクター、メーカー、ソフトハウスの展示場のテープカットと兼ねて行われたが、このような点にもASCEの産業重視の姿勢が見られた。

4) 開会式および基調講演(10月6日)：D. Martenson 大会会長の開会宣言、E.Grof ASCE会長の挨拶に続き、未来学者J.Naibitt氏による基調講演「地球の一体化と21世紀Globalization and the 21st Century」が行われた。講演ではビジネス環境はアジアが中心になること、その際、華僑の役割が大きいことなどが述べられた。

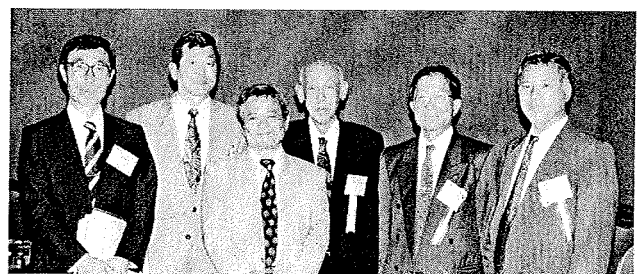


写真-1 土木学会代表団(中央:宮崎会長, 右から花村, 富永, 日下部, 三好, 筆者)



写真-2 会長会で発表する宮崎会長

5) 会長会合 (International Roundtable) (10月7日) : ASCEと協力協定を結んでいる世界52か国の学会から会長などが集まり、共通の問題について協議を行う場である。土木学会は、この会合への参加を重視しており、今回の参加目的の一つでもあった。ちなみに1995年のサンディエゴ大会には小坂会長、古池国際委員会幹事が参加し(筆者も随員)、土木技術者の資格問題を、1996年ワシントン大会では松尾総会長、国際委員会富永副委員長、日下部幹事長が参加してBOTなどプロジェクトの実施方式について論議している。

今回はR.Smith ASCE国際活動委員会委員長を議長として「土木における持続的開発 Sustainable Development and its Applications」をテーマとして各学会の取組みの報告、意見交換が行われた。参加はアメリカを含め17学会、アジアからの参加は、日本、韓国、台湾、フィリピン、バングラデシュの5学会であった。

まずコスタリカ土木学会のJ.Sotela - Montero 前会長が基調報告として、同国における状況とその問題点を写真を交え具体的な発表を行い、つづいて各国代表が報告した。

アメリカはE.Groff会長が、土木技術者は持続的開発において、何が出来るか何をなすべきか特別委員会を設けて検討していること、この観点から倫理要綱 (Code of Ethics) の改定を進めていることを報告した。

日本からは、宮崎会長が環境委員会を設けたこと、96年にJSCEとしての環境問題への取組みを示すため、AGENDA21/JSCEを定めたこと、AGENDA21の実現を各方面に働きかけていることなどを報告した。ついで日下部国際委員会幹事長がAGENDA21に基づく土木学会地球環境行動計画をOHPを用いて詳細に説明した。

各国とも持続的開発のためには狭い意味での環境保全ではなく、エネルギー、廃棄物など幅広い問題を取り上げるべきことのほか、技術者の社会的行動の重要性や技術者の倫理を訴える発言が多かった。日本の発表に対して各国からは「具体的でたいへん良かった」という反響が多かった。その他、各国学会間の協力協定を結ぼうとの意見も出ていた。

6) CEO昼食会とCEOフォーラム (10月7日) : ASCE会員の中の企業経営最高責任者 (Chief Executive Officer) を対象とする昼食会に出てCEO会員と親睦をはかった。

昼食会に引き続くフォーラムはコンサルタント、コントラクターのCEO 5人を講演者とした討論会で、参加者との間で活発な質疑応答が行われた。

大会全参加者は正会員1700名、同伴家族と学生会員400名、計2100名であったが、その中に200~300名のCEOがおりその人たちがこのフォーラムに参加したわけである。

質疑応答はいずれも企業経営に関するものであった。

カントリーリスクをどうやってカバーするか

- ・社員の教育・訓練にいくら投資しているのか。その投資の回収方法は?

- ・ASCEの一般会員に国際活動の重要性を認識させるには?

- ・リーダーの育成法、発見法は?

- ・小企業において企業文化の継続性をどうやって保つか

- ・女性、少数民族の役割は? (ASCE会員の5%は女性)

などのやりとりは日本の土木学会での議論とは際立った違いを見せていた。

7) 協力協定調印式 (10月7日) : ASCEは国際化戦略に基づきこれまでに52か国の学会と協力協定を結んでいるが、今回コスタリカ土木学会と新たに協定を結んだので合計53か国となった。さらに1990年前後に協定を結んだ8か国と協定の更新も同時に行った。

日本とは1988年に協定を結んでいるのだが、これら各国との締結年が意外に新しいこと、つまりASCEの国際戦略は動き出してまだ日が浅いこと、またそれだけ活発であることに気づく。

8) 国際夕食会 (International Dinner) (10月7日) : ASCE国際活動委員会の主催で各国代表を招いて行われた。R.Smith 委員長の司会で、ASCE役員を紹介を主な行事とし、バンドも入りのにぎやかな夕食会であった。席は国際親善に効果があるよう各国が入り交じるように配置されていた。会場では各国代表団とともにわれわれも紹介を受けた。

9) 年次大会と新会長就任式 (Annual Business Meeting, Inauguration) (10月8日) : 在郷軍人によって捧げられた米国国旗の入場、国歌斉唱につづき各種の技術賞、職業活動賞が授与された。受賞者の中には土木技術、産業の発展に貢献したとしてある州の議員が含まれていたが、ASCEの活動を象徴する授賞であった。また非常に権威ある賞として、Hoover元大統領が定めたHoover賞がある。これは全米の主要工学会が審査して、利他的で非技術的な活動によって人類に貢献をした技術者に対して授けられるものである。今年は砂漠地帯の住民を飢餓、病気から救い教育を行ったノースダコタ大学工学建築学部長O.J.Helweg氏に授与された。

ここで土木学会にとって非常に名誉だったのは夫人とともに出席された堀川清司名誉会員 (埼玉大学学長) がASCEの名誉会員に推挙されたことである。その紹介にはマルチメディア・プロジェクターによるパーチャル・ギャラ



写真-3 名誉会員に推挙された堀川学長

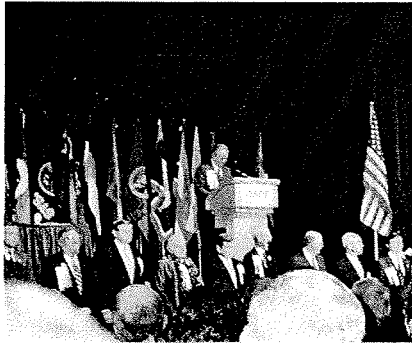


写真-4 新役員の就任式

リーが用いられ、非常に臨場感のある発表がなされていた。退任する Groff 会長はこの1年をふり返り、ASCEが1993年に定めた発展計画（前述）に沿って着実に発展してきたこと、それは政府への影響力の増大、国際的な影響力の増大となって現れていることを強調した。

Davis 専務は事業報告の中でASCEが質・量ともに強化されたこと、本部をニューヨークからワシントンに移転させるという大事業にも成功したこと、会員数は12万人、年収3400万ドルに達していることを述べた。

つづいて新会長、新理事の宣誓が力強く行われた。L.Graef 新会長の就任演説は、前会長の方針を引き継ぎASCEを発展させるというものであった。会長は1年交代の任期であるが、次期会長としてすでに1年前から学会運営に関わっていることにより継続性が保たれるのである。

ここできわめてアメリカ的だと思ったのは前会長が夫人を壇上に招いて総会参加者に紹介し感謝のキスをしたこと、新会長がお孫さんまで含め家族全員を紹介したことである。

ここにもASCEの社会的性格が現れていると感じた。

10) 祝宴 (Gala Banquet) (10月8日) : 大会の最後の締めくくりは祝宴である。L.Graef 新会長、D.Turner 次期会長の紹介、Hoover 賞受賞者の紹介、堀川教授のほか名誉会員の紹介があり、つづいてフルコースの晩餐、ダンスパーティーとなった。

筆者の属する国際コンサルティングエンジニア連盟 (FIDIC) は、職業団体ということもありドレス・コードはかなり厳しい。ASCEも大会案内には祝宴にはブラック・タイが望ましいとあったので筆者はタキシード、家内は和服姿で出席したのであるが、そこまで正装している人は割合に少なくやや拍子抜けしたものである。しかし学会にドレス・コードがあるというのにも欧米流であると思った。

国際土木技術会議アジア会議 (10月9日)

すでに学会誌で報じられたように第1回国際土木技術会議アジア会議が、日・米・比3学会共催で、1998年2月19、20日にフィリピンのマニラで開かれる。その準備のため今回、ASCE大会の直後にアジア会議実行委員会 (Steering Committee) を行うことになったものである。この委員会に参加することも代表団の重要な目的であった。

実行委員会には土木学会から三好専務、国際委員会富永副委員長、日下部幹事長、花村委員と筆者の5名が参加した。ASCEからはGraef新会長、P.Galloway元国際活動委員長 (アジア会議実行委員長)、J.Gast事務局長など、フィリピン土木学会 (Philippine Institute of Civil Engineers Inc.: PICE) からはF.Cruz会長、N.Villanueva事務局長などが参加した。

議事はGalloway議長のテキパキとした采配により、紛糾しそうな議題も円滑に進行し予定通り終了した。主要な議題は下記のとおりである。

1) 会議の正式名称 (日本提案) : 名称がまちまちで混乱している。とくに一部で使われている "in Asian Market" なる語は誤解を招くとして削除を提案し承認された。正式名称は "(1st) Civil Engineering International Conference - Civil Engineering in the Asia Region" となった。

2) 寄付および支出 : 寄付申込み額は9日現在29万ドルを超えた。これには日本が目標の5倍近くも集めたことが大きく貢献していると評価された (これについては協賛していただいたコンサルタント20社、コントラクター10社の方々に誌上を借りて深く感謝の意を表するものである)。

支出項目、剰余金の分配方法等についても協議した。日本は剰余金から次回以降のため準備金 (Seed Fund) を用意したらどうかとの提案をしたが、結論は1998年のASCE理事会以降に持ち越しとなった。

3) 大会準備状況 : ASCEより大会案内が完成したことが報告され、また学生を対象とする懸賞論文の応募状況が報告された。

PICEより大会名誉会長のラモス大統領の行動予定、会場、ホテルの準備状況、ツアーなど社会的行事の準備状況が報告された。

土木学会からは懸賞論文募集状況、基調講演の準備、技術部会の運営方針、日本文化の展示会の準備状況を報告した。

4) 2000年日本大会 : 次回大会を日本で開くことを正式に提案し歓迎の拍手で承認された。時期、場所、メインテーマ (一例として防災があがっている) は未定である。

感想

ASCE大会に参加して、アメリカを中心とする国際化が土木学会にも荒波となって押し寄せてきたということを強く感じた。とくにASCEは「発展計画 Strategic Plan」に従って、社会的な変化に自らを対応させるのに成功し、その計画による一連の政策を国際的に押し出している。JSCEもその影響をまともに、こうむりつつあるのだが、ASCEの政策のうち社会的活動の重視については筆者はむしろ共感を覚えるのである。

いずれにせよわれわれ土木学会いや建設産業界の今後の戦略に大きく影響する形で、ASCEが活動していることを認識しなければならないと感じている。